

## 第3期第7回生涯学習センター運営協議会 議事要旨

〔日 時〕2017年1月24日(火) 9:30~11:30

〔場 所〕生涯学習センター 学習室2

〔出席者〕※敬称略

委 員：太田 まゆみ、大野 浩子、島田 忠次、白崎 好邦、陶山 慎治、  
辰巳 厚子、中里 静江、中村 香、前田 美幸、柳沼 恵一  
以上 10名

事務局：板橋センター長、鈴木担当課長、小林管理係長、松田事業係長、高木担当係長  
中野担当係長、村田担当係長、渡部担当係長、齊藤主事(記録)

〔欠席者〕岩本 陽児、上村 まり

〔傍聴人〕2人

〔資 料〕・第7回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・公民館事業の現状と課題(資料1-1)
- ・生涯学習推進事業等の現状と課題(資料1-2)
- ・ことぶき大学前期募集講座「美術コース」(No.1)
- ・乳幼児の保護者向け講座「キラキラママになろう」(No.2)
- ・幼児の保護者向け講座「子育てのビジョン」(No.3)
- ・市民企画講座「子どもの貧困を考える」(No.4)
- ・市民企画講座「シニアのための安心ライフプラン」(No.5)
- ・町田地方史研究会共催講演会「北条氏照の由井領支配と戦争」(No.6)
- ・保健所共催講座「ひきこもる心を理解する講座」(No.7)
- ・鶴川地区協議会共催講座「アクティブシニアのあなたへ」(No.8)
- ・コンサート事業「南米フォルクローレ～アンデス・パラグアイ音楽紀行」(No.9)
- ・生涯学習ボランティアバンク1日体験講座(全8講座)(No.10)
- ・事業評価の最終報告(第5回資料2-1～資料5)
- ・コンサート事業「モンゴルの民族楽器 馬頭琴の調べ～”スーホの白い馬”の世界」  
(3/11開催)(資料2)
- ・第53回東京都公民館研究大会「公民館のこれまでとこれから」委員メモ

### <議題>

会 長：今年度は現状と課題の認識を深め、来年度には課題の解決に向けて検討を行う。今年度はアメリカ大統領が代わり、ヨーロッパも選挙を控え、大きな変革の時代に入っている。公民館の歴史も70年経つ。様々なところで今までの既存の価値観を見直し、新しい価値観を創造する時期に来ている。今までのところを良く理解した上で今後の発展に向けて模索していきたい。

#### 1. 生涯学習センターの役割と機能について

○公民館事業の現状と課題について(資料1-1)(※前回からの続き)

・障がい者 青年学級事業

会 長：40年以上の歴史があり、全国的にも評価が高く注目されている事業である。しかしながら、現在ではボランティアの確保が課題である。当初から活動している学級生がいる一方で、新しい人の受け入れが進まないという現状がある。

事務局：ボランティアの募集状況について。広報まちだに掲載している。学生が狙い目なので大学の授業に参加したり、大学主催のボランティアのイベントに学級生と参加しPRに努めている。また、自治会、町内会掲示板に年1回の掲載依頼をしている。

ボランティアは全体で60名弱、そのうち学生は10名ちょっとである。60歳以上のアクティブシニアの方の力が大きい。学級生は172名。

会場のキャパシティ的には増員も可能だが、ボランティアが増えないと受け入れが難しい。現在の活動も安定的に行えているかという点、他学級の応援をもらいながら活動しているのが実態である。

青年学級の成果発表についての招待状をお配りした。これは6月から始まって3月までの16回の活動を行い、一年間の活動のまとめとしてステージで発表する。今年度は2月26日(日)に「ひかり学級」、3月4日(土)「土曜学級」、3月5日(日)「公民館学級」に行く。ぜひお越しいただきたい。

委員：3学級の特徴はそれぞれあるのか。募集は、年齢層等ターゲットを絞ってはどうか。

事務局：目指すところは共通なので、活動場所や時間の違いはあるものの、はっきりとした区別や特徴はない。歴史的には、まず公民館学級が出来て、学級生が増えたので、ひかり学級、土曜学級と出来た。平均年齢40歳で、年齢層の差もない。20歳過ぎから70代の方までと幅広い。40年以上参加している方もいる。ボランティアの募集については、長くかかわっていただけの方でない、難しい事業なので若い方に来ていただきたい。大学や専門学校を重視して募集しているが、学生はなかなか難しい。現役世代の参加も厳しいが、福祉・教育・行政関係者の参加はある。元気な60歳以上の方に向けては自治会にしか呼びかけてはいない。有償ボランティアなので、高校卒業以上との規定がある。

委員：学生さんにとってハードルがあると思うが、ボランティアを学べるような講座など受け入れ態勢のようなものはあるか。

事務局：過去に、ボランティア養成講座事業の中に、青年学級を組入れたことはある。市民大学の福祉講座で青年学級の紹介も行ってはいるが、青年学級に限った入口の事業は行っていない。ボランティアとしてもハードルが高い事業であり、見学は多いが、定着が難しい。フォローが大切。ボランティアスタッフ同士で育てていくノウハウはあるが、門戸を広げる為の入口の事業も必要かもしれない。

委員：大学や学科、部活動等、どのような学生さんがいるか。

事務局：桜美林大と和光大の学生が多い。桜美林には福祉系の学部があり、ボランティア部の学生は歴代来ていただいている。その他、国学院大学の教育学部系等の学生。

会長：毎週の打合せもあり、時間の拘束もあり厳しい。

事務局：毎週木曜日の夜間に定例会議があり、学級の準備と、振り返りを行う。当日は10時～16時くらいまで活動があり、その前後30分の準備の時間を入れてボランティアにはその日一日来ていただく。企画から参加するボランティアと当日のみ参加する2種類の形態がある。

委員：ハードルが高い。今の学生には時間的制約がある。会議に出ることも難しい。一方で、その場限りのボランティアでは自分の学びがわからなくなり、意味が捉えられない。仕組みそのものから考えていく必要がある。

事務局：情報の共有という点からも学級の振り返りを行わないと意味がないので、夜間の会議ではなく、学級が終わった後で行うという案も出ているが、時間的になかなか厳しい。運営の仕組みも変えていく必要があるかもしれない。

委員：学生の主体性に任せると難しい。ゼミなどの授業の中に盛り込んでいかないと難しいだろう。振り返りも授業の中で十分に行わないと意味がない。かなりハードルの高いボランティアと言える。

事務局：桜美林大にはゼミの中でお願いをしている。

会長：以前は法政大にもあったと思う。今後は高齢者のボランティアも重要である。

委員：町田の丘学園も非常に生徒が増えてきている。青年学級が長く続くのは良いことであるが、入れ替わりも必要である。平日デイサービスは土日行わないので、人気がある事業と思われる。親の会も最近は機能していない。子どもの障がいを受け入れていく大事な時期に、親同士のつながりは非常に大切である。最近では卒業後に親同士のつながりがなかなか持てないという声がある。かつてはその部分を青年学級が支えてきたと思う。ある程度年齢を区切りながら、本人同士のつながりと、親同士のつながりを支えていくことが必要。高齢になった方の次の居場

所を別の機関が用意していくことも、考えていかななくてはならない。生涯学習センターが高齢期に差し掛かった知的障がいの方を受け負うのは正直難しいだろう。いろいろな機関で行うのが良い。当時と比べて、福祉系の大学・専門学校数も減り、学生数も半分になってきている。介護福祉士や保育士や医療系の資格を一つの資格にしようという話もある。福祉系よりは、教育学部の学生が良いと思う。玉川学園で講師をしているが、特別支援学級も視野に入れて学校の教師を目指す学生は多い。法政大のボランティア部やゼミの先生等にももう一度働きかけてみると良いかもしれない。アクティブシニアに関しては、鶴川での話だが、社会福祉法人が抱えているボランティアを交換しようという動きがあり、例えば悠々園に登録した人が例えば障がい福祉施設に行ってみるといことも行っている。

会 長：いろいろ建設的なご提案をいただいた。町田の丘学園の卒業生の受け入れに貢献できるような体制づくりを考えていただきたい。

#### ・ことぶき大学

会 長：ここでの課題としては、他部署の事業や、市民大学との差別化が既に上げられている。60歳以上対象ということだが、今日では、60歳だとまだまだ高齢者というには早いという感覚もある。

事務局：平均受講者年齢は、73.5歳。受講生の年齢が市民大学と重なる。

委 員：シニアの講座をいろいろ見てきて、増加するシニアに対して市としてどう対応していくのが課題である。75歳まではアクティブに活躍することも期待されているので、考えていく必要がある。余暇活動として受け身の講座もニーズが高く、外に出るきっかけとなる等、意義はあるが、生涯学習センターとして行うのであれば、座間市「あすなろ大学」のような調べ学習・ゼミ活動のようなバリエーションがあってもよいと思う。テーマを見つけ、調べたことを発表する中でシニアの立場からの新しい課題を発見し、また新たな学習に生かすという循環が生まれる。

委 員：プログラムは職員が企画し、アンケートの集計まで行っているということだが、座学で受け身的な講座が主であり、「楽しく学べれば良い」ということぶき大学に対して、市民大学の「地域に返す」というのが難しい。現実的に今や市民大学は、地域に還元出来ていない。これ程難しいのなら、正直、ことぶき大学で楽しく過ごせば良いのではないかという本音もある。もう少しことぶき大学も「自分達で考える」という講座があっても良い。カルチャーセンターと同じだが無料で受けられるのだから人気は絶大なものがあると思う。

事務局：以前は少人数の講座も行っていたが、人気が非常に高く、希望者が年々増えていったので、座学にシフトしていった。いつも定員を大幅に超える申し込みがあるが、今年抽選に当たった人は翌年優先されないのので、(結果的に)受講できないが、一年たてばまたリセットされるので、隔年で受講することもありえる。過去のデータがないので詳細は確認できない。

委 員：一つ気がかりなのは、今年受講出来た人は来年度優先的に受講することができないということだが、8講座全体の応募倍率を見ていくと、1.9、1.8倍なので、翌年受講できる可能性があるというのはわかるが、人気講座の例えば「健康コース」だけで見ると、400%、500%で、今年は600%近い。5年も6年も応募しても当たらない人が出てくるという事になる。これでは応募をあきらめてしまう人も出てくるのではないだろうか。何らかの工夫が必要ではないか。なお、出席率(参加率)は毎年上がっており、企画やコンテンツが毎年改良されて、より良いものになっている成果と思われる。応募の絶対数の動向や傾向はどうなっているか。

事務局：2013年は1,574人、2014年は1,819人、2015年は1,681人、2016年は1,761人と、各年で魅力的なタイトルがあるかどうかによって人気の差はあるが、概ね応募者数は横ばいである。本来、受講対象年齢層の増加を考えると、受講者は増えていなければいけないかもしれない。

会 長：ことぶき大学の歴史は7年間同じ先生で人気はあるが、受講者も固定化されているようだが。

事務局：これまでの反省もして、来年度の企画では、半年は大河ドラマを離れて日本の名城紀行を企画している。受講をきっかけに旅行をしてもらえればと考えている。

事務局：高齢者事業について、先週の公民館の研究大会の分科会でもテーマになっていたが、やり方はまちまちである。地域の中での仲間づくりという目的が中心である公民館や、特化した事業を行っていない公民館もある。自治体の規模による違いもあるので、地域の状況も比較しながら町田市に合ったやり方で対応していく必要がある。

委員：この3月末で、町田の介護保険事業所は要支援1～2の人の受け入れは基本的に地域に移行していくという動きがある。社会福祉協議会中心に、地域で受け入れるための仕組みを作っているところだが、社協のサロンは手を挙げていない。介護保険事業所以外での地域の高齢者の受け入れというのが町田では上手く進んでいないところがある。地域社会事業として元気高齢者の居場所づくりについて検討しているところだが、地域の高齢者の居場所を作っていく中で、生涯学習センターがことぶき大学を変化させながらサテライト的に増えてもらうことに期待したい。杖歩行の人も行けるというイメージである。

委員：居場所も重要だと考えて、長くそのことについて携わってはきた、人材を育てることも重要な役割の一つではないか。ピアノを弾ける人は地域に多いので、歌声喫茶のような合唱サークルの作り方を学ぶといった講座があっても良いのでは。健康講座もそれぞれの地域で行われると良い。そのための健康ボランティアの育成講座を行うという方法もある。

会長：そのような活動こそ市民大学で行い、ことぶき大学と絡めて行っていくと良いのではないか。

委員：地域の市民センターをうまく活用して、ことぶき大学を地域に展開していくことも検討していただきたい。

委員：予算の問題があるとするならば、有料化してはどうか。参加者の目的意識も高まる。

事務局：補助金が半分出ているので、他の展開（地域展開や調べ学習等）が進まない理由としては、予算よりはマンパワーの不足がある。

委員：ことぶき大学を窓口にして（ボランティアの募集も含めて）他事業の案内をしてはどうか。

事務局：チラシの配布は行っているが、積極的に時間を割いてはいない。

委員：子ども食堂の作り方が全国的にヒットしているが、歌声喫茶の作り方のようなものを是非やってみようという面白い。月2回ならボランティアをしても良いと考えている人が多いと言われていたので、ボランティアの問題を考える上で参考にしていきたい。

会長：ことぶき大学については、来年度の解決策に向けて、市民大学との連携や人材確保等の観点から、総合的に考えていきたい。

#### ・家庭教育支援事業

会長：前回説明があったところで、他部署の事業との差別化や、地域での展開が家庭教育支援事業においても課題となっている。

委員：相模女子大で、保育士を目指す学生のための講座では、実践的な経験を積むため、子育て中の親子や、祖父母世代との交流を取り入れた講座を行っている。様々な年齢層との交流が出来る機会があると良い。

委員：地域で活動している団体を取り上げて欲しい。例えば、たぬき山の活動も、活動を知らない人や、知っていても参加した事がない人が多いので、講座をきっかけに知っていただきたい。共働きが当たり前になってきている。平日よりも、父親の参加も期待できるので、土日開催が有効である。

事務局：前期の乳幼児の保護者向け講座では、地域で活躍する子育てサークルの方を招いた。受講者には、子育て中でも学習できるという気付きを持ってもらった。保護者向け講座は、主に平日に開催しているが、手法を考えながら、土日開催も検討していきたい。

委員：受講後、サークル作りや自助活動も必要だが、講座を受けたあとにいくつか受け皿が用意されていると、活動をつなげていける。

委員：私が色々な講座を担当する中で思うに、平日に参加する母親たちの特徴は社会から離されていることに不安を感じている人が多い。しかしながら、平日に行っている講座は知識を提供し「完璧なお母さん」を目指すような講座が多いという印象を受ける。これでは母親は余計に追い込まれて、不安が子どもに向かってしまうのではないだろうか。むしろ母親が自ら何かを企画して、自信を持てるような講座にすると良いのではないだろうか。

委員：地域の高齢者と接する中で、嫁や孫との世代間のギャップから、孫とどう接して良いか、わからないという声を聞く。また、地区協議会で行った若いお母さん向けの講座で、地域の高齢者にお子さんを預けるという試みが大変好評だったが、高齢の方からは、預かるための、事前の講座のようなものがあると良いという声もあった。提案として、まずは家庭から、そして地域での活動へ向けて、元気なシニアの方々に対して、今の子育てや、お母さんたちの考え方を伝えるような講座があると良い。

事務局：家庭教育支援事業とは、地域において家庭教育の支援の担い手になる人材を育成するということが目的で、ご高齢の方がその担い手になるという場合もあるだろうが、むしろ今まさに子育てをしている世代を対象にしている。たとえば、今、子育てひろばに来ている人が、将来的にはひろばなどを企画できるようになり、さらにそのお母さんたちが、次のお母さんたちにつなげるといったような、循環型の家庭教育支援事業を目指している。

委員：参加者のために、次の回や企画へ結びつける為の部屋の確保や予算等はつけているか。講座だけで終わらせないようにしているのだろうか。講座から次につなげるのはなかなか難しい。

事務局：家庭教育支援事業のみにかかわらず、ことぶき大学や市民大学等でも、修了生の団体が起ちあがっているように、公民館の事業において、それは重要な役割である。家庭教育支援事業においては、保育士を配置し、各講座修了生向けのゼミ形式の講座をセンター事業として用意している。

委員：子育てを母親だけが行うものと考えのではなく、平日開催の見直しや、地域での子育てということから、父親、高齢者等、対象を広げても良いかもしれない。

委員：講座を受けただけで終わるのではなく、次につながるものになって欲しい。産休の「お母さん」たちに向けての事業もあると良い。

会長：続きは次回に行う。

## 2. 協議事項

### (1) 事業評価について

＜担当割当＞ (No.1) 前田委員、(No.2) 太田委員、(No.3) 陶山委員、(No.4) 中里委員、  
(No.5) 柳沼委員、(No.6) 辰巳委員、(No.7) 中村委員、(No.8) 大野委員  
(No.9) 島田委員、(No.10) 白崎委員

### ※担当者順に説明

#### ○ことぶき大学前期募集講座「美術コース」(No.1)

事務局：鑑賞の仕方や作品の裏にある史実を解説いただき、弁舌の良い講師で、満足度・理解や関心度の高まりも非常に高かった。プロジェクトの修理中はポータブルを使用したけど、映りも鮮明で支障なく行えた。もともと関心の高い方が出席されたこともあり、出席率は非常に高く、参加者の感想では、「今まで行く機会のなかった美術館へも足を運ぶきっかけづくりになった」という評価を頂いた。「説明と絵の資料が欲しかった。」「内容が詰め込みすぎ。」という意見もあり、妥当性はBとした。講師は各回綿密にストーリーを考えて、毎回100枚の画像を準備されていたけど、結果的に時間が足りなくなった。画像をお配りするかどうかというところで、法制課の弁護士とも相談し、「著作権に触れるので、お配りできない」という結論とした。受講者の方にも初回に説明する必要があった。

#### ○乳幼児の保護者向け家庭教育力アップ講座「翔び出せ！キラキラママ☆」(No.2)

事務局：10月～12月まで全7回、8か月以上3歳未満の乳幼児の保護者を対象に開催。家庭教育支援学級のグループ(15ゼミ)が、学習成果を発揮する場として企画、運営し、公募受講者とともに学んだ。出席率は80%。企画側と公募受講者側にわけて参加者意見を記載してあるのでご覧いただきたい。今回、企画側の保護者の保育枠を確保したうえで開催した。一方で一般受講希望者の募集枠が減少したので、募集方法について今後検討したい。今回の受講生が企画側のグループに入ることはできないが、今回の受講生と、次に説明する幼児講座の修了生を含めた形で、新たに講座修了生グループを作るため、今準備の真最中である。

○幼児の保護者向け家庭教育力アップ講座「子育てのビジョン」(No.3)

事務局：対象は（幼児2歳以上就学前）の保護者で、10月～12月まで全6回の開催。講義だけではなく、グループワークや振り返り等を行った。保育の必要がない枠（10名分）を設けたが、申込者が3名だったので、保育を必要としない母親たちに情報が届くためのPRや、対象者や内容を絞るという方法も考えたい。連続・単発講座等も検討したい。

○市民企画講座「子どもの貧困を考える」(No.4)

事務局：市民団体（まちだ「女性プラン」を考える会）からご提案いただいた企画案をもとに開催した。第1回と2回は座学による学術的な話を中心、第3回は実際に支援に取り組んでいる方の話、第4回は町田市子ども家庭支援センターと町田市社会福祉協議会の職員による市内での取り組みについての説明。第5回は町田市内で子ども食堂の運営に携わっている方（柳沼会長）からのお話と、参加者による話し合いを行った。応募者数は最終的に40名。昨年は「子どもの貧困」について、新聞・インターネットなどの報道で目にしない日はなかった一年であったので、非常にタイムリーな講座であった。効果目標については理解できた（43%）・まあまあ理解できた（57%）を合わせると全員「理解できた」を達成した。講座終了後も「実践にむけた活動を今後行いたい」という声があったので、生涯学習センターとしても、情報収集・提供面で支援していきたい。委員から意見のあった、「調べ学習」については、受講者に提案してみたい。

（質問・意見）

会 長：保育が不要の枠10名の申し込みが少なかった理由は何か。

事務局：祖父母と同居・近居の方や、一時保育利用者の参加を想定したが、実際には申し込みは少なかった。

委 員：地域で子育てをするという意味で、近親者の手を離れて、保育所等を利用してもらうのも一つの方法。子どもの成長にも、親の子離れにも効果がある。

委 員：No.7の「子どもの貧困」と合わせて、前提となる親の貧困についてディスカッションの中で取り上げられたか。

事務局：学術的解説は1・2回で、第3回目では、経済的貧困以外の部分で子どもの貧困が生ずる背景について支援活動の事例等をもとに解説した。

会 長：アンケートで「子どもの貧困について理解できた」という回答率の目標値が達成できなかった点についての理由は何か。貧困の原因について理解するのは、構造的な背景があり、なかなか難しいということだろうか。

事務局：「全部が全部理解できたわけではない」という声がアンケートに寄せられたが、「理解できた」とするにはおこがましいほど、根深い問題が背景にあるからだと思われる。また、学術的で話が難しかったという部分もあると思われる。

事務局：40代50代が、4割。60代、70代が6割。男性も比較的多く参加していた。

○市民企画講座「シニアのための安心ライフプラン」(No.5)

事務局：市民企画団体「成年後見支援シートラスト」との共催。事業の有効性の評価でBをつけたのは効果指標「高齢期の生活の備えが理解できたと答えた人の割合」が70.8パーセントで目標値の80%に達しなかったから。関心が非常に高いことは応募状況やアンケートからも伺えたが、一度聞いただけでは理解できないという声も多く、継続的な学習が必要な内容であった。

○町田地方史研究会共催講演会「北条氏照の油井領支配と戦争～戦国時代の町田をめぐって～」(No.6)

事務局：ここ数年取り組んでいる町田地方史研究会との共催講座で、毎年とても人気がある。今回は八王子の内容が中心だったが、講師は元高校の先生で受講者の満足度も高かった。

○保健所共催講座「ひきこもる心を理解する」講座 (No.7)

事務局：毎月1回の企画委員会の振り返りの中から企画した。参加者からは理解が得られたという感想を得られた。NHKのおはよう日本でも少し取り上げられ、関心の高いテーマであった。今後は生涯学習センターとして「ひきこもり」の当事者への支援も考えていきたい。

○町田市地区協議会共催「アクティブシニアのあなたへ～地域デビュー大作戦！～」(No.8)

事務局：センターが地域に出ていくというご意見から、鶴川地区協議会3水スマイルラウンジで、行った。地区協議会に関わっている社会福祉法人2団体に実行委員会として参加していただいて内容を練り上げた。応募が28人。50パーセント参加しなかった理由について事前質問があったが、全く参加しなかった人が6人で22人参加。内、全回参加者は6人。半分以上の方が3回以上参加した。広報で見ても参加したのは5～6人ほど。多くは地区協議会の皆様が地域に呼びかけに応じて参加した。

委員の意見がどう反映されるのかという質問について。運営協議会で頂いた意見は事業評価シートの「前回の委員意見」の部分に反映され、講座の企画において活かされている。キャンセル待ちや受付方法の改善、講座の定員と欠席を見込んだ申込受付数の工夫等を実際に取り組んでいる。今後も皆さんの意見を取り入れて講座の企画に活かしていきたい。

(質問・意見)

委員：地区協議会の立場での感想として、手応えは非常に良かった。参加者は30人に満たなかったものの、半分くらいの方が具体的に活動を始めて下さっている。町田には公民館が1つしかなく、大きい場所で大勢集めるということを繰り返してきたと思うが、少人数でも、あるテーマを切り取って、生涯学習センターが地域に出て行って講座を行うことで、参加者たちが実際につながるということに意味があると思う。町内会の加入率も50%を下回り、オールラウンド・オールマイティに活動する町内会がどんどん力を失う中で、子どもの貧困やアクティブシニアといった問題等を各地域で話し合う事が必要。鶴川地区協議会としては、新たな地域活動を始める人たちに補助金を付けていくことを考えているので、地域の新しい担い手をつくるという点で今回の講座はとても良かったので、来年度もオーダーを入れていきたい。

委員：「ひきこもる心を理解する」講座について。保健所共催ということで、ネットワーク型行政といわれている中で非常に良い取組み。社会的課題に対応していること、実行委員会形式であるという点でも素晴らしい。事業を継続する上で、どのようなところに力を入れて取り組まれてきたか。

事務局：講座の振り返りの延長が企画委員会につながっていった。「自分達の意見が反映された講座となった。」と満足いただいている。当事者の親として、1回目受講した時は、まだよく理解できなかったものが、翌年企画側に参加することで理解が深まり、どのように取り組んできたのかという自分の姿勢が明確になったという感想もあり、企画に参加された方はより明確に学ぶことができたようだ。何よりも、ご家族の方が企画に関わってくれたことは、職員としても後押しをされ、強い課題意識を持つことにつながった。ただ、今回ひきこもりの支援に一貫して疑問を感じる参加者もいたので、「親だけの講座にして欲しい」という意見も出た。生涯学習センターとしては、当事者だけではなく、広く市民に向けて講座を行うことで、「ひきこもり」に対する理解の眼差しを持った社会を作りたいという思いがある。新たな課題は回を重ねるごとに生まれると感じている。

会長：「シニアのための安心ライフプラン」についても、内容がなかなか難しく、専門的な法律の話もあり、何回か、段階的に解説がないとわからないので、生涯学習センターの事業としても工夫が必要。今後も継続的に行う考えはあるか。

事務局：超高齢社会の中で、なんらかの支援や、情報提供を行うという役割があると思っている。

委員：「アクティブシニア」の講座は、広報を見ての、全くの初めての参加者は6人で、その他は仲間内での呼びかけに応じた方ということのようだが。

委員：そもそも、この講座は鶴川にお住いの定年退職前後のサラリーマン、業界では有名だが、地元では知られていないような集めにくい方が参加してもらうことを目的とした。地域で活躍されている奥様に声掛けをお願いしたが、実際には難しかった。定年退職のサラリーマンが地域

で関わりを持っていないというのは、町田市の地域の特徴としてもある。

事務局：6人の方は、広報をきっかけに、まさにそういう思いで受講してくれた。その他は、情報がない中で、チラシを配ってもらい参加者を集めた。

委員：一つやっている人は3つやっているのではなかなか忙しく伸びしろがない。全く何にも導線がない、初心者の方がどれだけ参加されたのか、関心を持った。鶴川ではもう一度開催したいということでしたが、他地域で行う予定はあるか。

事務局：市民協働推進課からも他の地域でも行ってほしい、という要望はあったので、可能性はある。

委員：鶴川地区の団体はどのような分野の方か。

委員：地域デビューというときに、地域の活動だけでなく、飲み友達や野球チームでもいいという、ゆるやかなところから始めて、鶴川地区の社会資源としてボランティア団体やNPO法人を紹介した。鶴川地区協議会の活動も紹介し、サポーターの募集を行った。

委員：市民大学に参加してみたいという意見もあったようで嬉しく思った。

委員：生涯学習センターの紹介も行った。

事務局：活動団体の紹介のところで、市民大学で学んだことを話してくださったので、職員が宣伝するより効果があった。

委員：地区協議会の共催講座は、今回初めてということだが、今後毎回ぜひ定例化して他の地域でも行ってもらいたい。鶴川の取り組みを紹介しても良い。

会長：鶴川はトップランナーである。地域ごとの状況もあり、課題も人の集め方も異なってくるし、マンパワーの問題もあるだろう。

#### ○「南米フォルクローレ～アンデス・パラグアイ音楽紀行」(No.9)

事務局：前回と組み合わせを変えて開催した。応募者が多く、効果指標の目標達成率も高かった。演奏もあり、歌も衣装や文化の解説もあり、とても楽しく、満足いただけた。しかしながら、プログラムが盛り沢山で、時間がオーバーしてしまったことや、日曜日の午後だったが、参加者は60代以上が93%以上だったので、若年層の集客が課題。

#### ○生涯学習ボランティアバンク1日体験講座(No.10)

事務局：12月12日～18日の約1週間で9つの講座を実施し、生涯学習ボランティアバンクを広く知っていただくために行った。残念ながら1つは参加が少なく、8講座の実施となった。参加者生涯学習センターを知ってもらい、活用してもらうことが目的だが、一つの講座として完結してしまい、今後の利用につながるかどうかという点が課題である。

(質疑・応答)

委員：中止になった講座は何か。

事務局：おもちゃドクターの講座が中止となった。おもちゃドクターの活動を紹介する講座としたかったが、応募された方は、修理してもらえと思った。

委員：今回の中で、もう一度やりたい、近くで来てほしいという声はあったか。

事務局：背骨コンデショニングに参加された方の中から、1団体が出来た。更なる活用をしてもらいたい。

委員：現在ある地域課題について、自分のタレントならどのようなことが出来るということを発表する企画があっても良い。

事務局：地域において実際のニーズとボランティアを積極的に結び付けるような機会をつくることは、今のところ行っていないので、今後は制度の利用や活用を増やす上でも検討したい。

会長：今後それは大変重要になってくると思う。学校等でボランティアの方が出前講座を行う等の活用方法もある。

### 3. 報告事項

#### (1) センター長事業最終報告

・ご意見ありがとうございました。報告書をお配りしたので、ご覧いただきたい。

(2) センター長報告

・登録要件の緩和について（4月1日実施、2月1日広報掲載）

- ① 登録団体の代表者の要件を、「20歳以上の市民」から「18歳以上の在住・在勤・在学」に改訂。学生の登録が可能になり、子どもセンター（18歳以下）で活動していた団体の受け皿になることが出来る。
- ② 施設案内予約システムの個人利用登録ができる。18歳以上の在住・在勤・在学の個人も、抽選月の翌月から空き予約がシステムで可能になる。市内の施設全体では、夜間、特に土日の利用率が低いので、要件の緩和による利用率の向上を期待する。

(2) 町田市生涯学習審議会についてからの報告

会長：①公共施設の再編と②学校と地域の連携について検討された。生涯学習審議会委員が本日欠席のため、詳細は次回報告する。

(3) 東京都公民館連絡協議会の報告について

・第53回東京都公民館研究大会に出席した各委員からの報告

委員：第53回東京都公民館研究大会が1月21日（土）に開催された。委員部会としては第四課題別集会「少子高齢化時代の公民館のあり方について考える」を企画した。助言者は佐藤一子先生。定員42名で満席であった。グループ討議を進めて、各市の意見交換を行った。①公民館の活動を知っている人は市民の全員ではない。中高生も遊びや勉強での利用はあっても活動内容をあまり知らない。大人になってから公民館に帰ってくるようなことを考えていくことが大切である。②職員と市民が一緒になって地域課題を見つけ解決策を協働で探していくのが公民館のあり方である、という話が印象に残った。

会長：今回のテーマは「公民館のこれまでとこれから～成果と方向性～」。基調講演は、三多摩テーマに象徴されるこれまでの成果を振り返り、これからの方向性として、地域との関係性を重視していくということが重要で、特に学校とどうつながっていくか、という話であった。第2分科会は100名くらいの参加者があった。これからの公民館は地域づくりにどれだけ貢献できるかが課題で、国分寺と小平市の実践例が報告された。いかに公民館として地域で活躍している人を呼び寄せることが出来るか、いかに企画者・実践者として行動することを学んでもらうかが課題と感じた。

委員：第3分科会「公民館からの発信を考える」に参加した。広報を見て評価し合い、グループワークを行った。①予算も方法も様々で広報を行っているが、必要な所に届いていないということ。②どこの職員もSNSへの期待・関心は高いが、まずは来てもらわないことには、SNSも見てもらえないので、そのために宣伝する人間関係をまずはつくらなければ、SNSの活用も必ずしも有効ではないということを学んだ。

(4) 今後の企画について

事務局：3月に行うコンサート事業について、ご意見・ご質問があれば担当まで。

4. その他

事務局：お配りしたチラシのとおり、2月12日（日）に学生活動報告会が行われる。学生7団体が参加するのでお越しいただきたい。